

---

# 観測者と世界の終焉

椎野 千洋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

観測者と世界の終焉

### 【Nコード】

N9222J

### 【作者名】

椎野 千洋

### 【あらすじ】

目が覚めて、そこは見たことのない世界だった。悪魔のような？観測者？デュアルに導かれた僕は、正体不明の世界？世界の終焉？へやって来た。目的はその世界をかき乱す者をやつつける事。品行方正、平々凡々な高校生、兼？ドリーマー？成瀬日和の痛快ドラマタラブコメディー冒険譚……なんかじゃないっ！かも？

## プロローグ

自分という存在を、分かりやすく説明する時、僕は決まってこう答えてきた。

深夜の交差点、人通りもなく、車も通らない中、歩行者用の赤信号が青信号に変わるまで、ただひたすら待ち続ける人間。それが僕だ、と。

詰まる所、僕は白か黒で言えば白なのだ。

正義か悪かで分けるのであれば正義側。

ただし、どこぞの胡散臭い正義の味方に憧れる、痛い人間というわけではない。ファンタジーの世界において勇者を名乗るつもりも無いし、非日常の凶悪事件に巻き込まれたとき、機関銃を片手に犯人に突っ込むようなアクションヒーロー張りの活躍は見せない。

しょぼい正義側なのである。

どれくらいしょぼいかを説明すると、混雑したバスに年配の方が乗車して来た時、真っ先に椅子譲りゲームには参加をせず、取り合えず寝たふりをしながら様子を見る。そして誰も名乗り出なかったとき、さも寝ていて気が付きませんでした的な空気を醸し出して席を譲る。そんなしょぼさだ。

こんな僕が、もし異世界に行ったら。或いは召喚。トリップ。

無いけどね。無いのだけれど、例えばの話し。

おそらく勇者ではなく、そのサポートをする魔法使いになるだろう。

結構合っていると思うのだ。前に立つて積極果敢には戦えないが、少々距離のある所から、ちまちまと魔法で敵の体力を削る。

そんなしよばい戦い方が僕にはきつとぴったりだ。

断じて、勇者などありえないという事だ。

無理だ、無理無理。

世界を救う？ 誘拐された姫を救出？ それは警察とか、あるいは騎士隊とか、クリスタルに見い出された戦士とか、ハイカラな格好をした髭づらの配管工とかの仕事だろう。僕ではない。

総じて、魔王などなりえないという事だ。

無いね、無い無い。

世界を征服？ 崇拜された姫を誘拐？ それは犯人とか、あるいは山賊衆とか、真の大魔王に見い出された手下とか、トゲトゲな甲羅をした鬼づらの大力メとかの仕事だろう。僕ではない。

いや、いやいや。

僕は何を考えているのか。異世界とか、勇者とか魔王とか。そんなものもを考えている自分が恐ろしい。クリエーターにでもなる気か？ 或いはゲーマー？ オンラインゲームの中では僕、勇者だか

ら。 的な？ 勘弁してくれよ自分。 そういつのはせいぜい夢だけに  
してくれ。 ドリーマーで十分だ。

そう思っていた。

現実的に。

常識的に。

## エピソード

「いいえ、貴方は村人です」

目の前の女。恐ろしいほど愛くるしい容姿をした悪魔。そう、悪魔としか表現し難い格好をした人物が、微笑みながら僕に告げたのだった。一瞬で人を虜にするような、大きくて美しい金色の瞳。絹のような光沢で輝く金髪。純白すぎて背景が透けてしまいそうな肌。全身を黒い衣で覆い、細くしなやかな腕と足だけが魅力的に露となっている。

それだけではない。気が付けばそこは、薄暗く、鈍重な空気に包まれた空間だった。一枚岩がくり抜かれたような起伏の激しいドーム状の部屋で、壁面は妖艶に燃え盛る紫の炎を灯した松明によって、不気味に照らし出されていた。そう、それはさながら物語に登場する邪悪なる者の住まう魔窟のような　　って、

「村人がよっ！　とてもじゃないが現在地の情景描写を事細く考えている場合じゃない！　場合というかこの場はどこ！　私は誰……いやいや、僕だし。成瀬日和、高校一年生」

「そうです。貴方はナルセ〃ヒヨリ。学生であり、成績は若干優秀。スポーツもまあ優秀。容姿もなんとなく優秀。性格も設定的には優秀で、性癖も憂愁。よって村人が妥当なのです」

「褒められているようだが、最後の漢字の間違いで悪意にしか感じられない！　そもそも性癖が憂愁な人間が妥当な村なんて、どんな村なの？」

愛くるしい微笑をこちらに向けてくる。女性は悪魔だった。

それも、陰湿そんな悪魔だった。

いやいや、村人って。そんなジョブがあるというのだろうか。

ここは 村です的なコメントをする事を生業とし、レベルが上がるとキーワードを喋り出す、みたいな？

僕はついカツとなった。

だが、それはどうでもいい事だ。大切なのは、現状を把握し事態の打開を図ることである。

まずは現状だ。目の前に悪魔的な、いや悪魔であろう女性がいる事も異常ではあるが、この異質な空間は何だ。

思い出す。そう、僕は変わらない日常風景に溶け込むかのようないつもの学生生活を終えて、自宅に帰った。母の適度に愛情こもった晩飯を食べ、風呂に入り、少しゲームをして、筋トレなんかもしちゃって、寝たのだ。

それがどうして、描写するにあたり適当な表現として、邪悪なる者が住まう魔窟、などと書かねばならないような場所にいるのだろうか。

事態の打開を図る為の答えなど簡単だった。

穴埋め問題の解答が、次の問題例文に書いてあった並に簡単だった。

寝たつもりが目覚めて、目の前に悪魔がいて、異常な場所に立っている。

「夢か！ いやーありがちな夢を見たもんだな僕も」

麗しい女悪魔は今だ邪悪に笑っている。好きになってしまいそうだ。そして、夢だという結論に不安が募る。

「そう、夢です。察しが良いですね」

やはり夢では無いようだ。と言う事は現実。確かに目の前の女性  
はリアルで生き生きとしているし、地面の感触だって、空気の重い  
感じだって、本物の

「え、夢なの？ 夢落ち？ すでに物語りがフィナーレを迎えよう  
としているっ！」

「はて、物語とは？」

「いや……ごめん忘れてくれ、興奮して変な事を口走った」

なんと夢だった。

夢落ちだった。

皆さん、物語は終わりそうです。

それでは、また会う日ま



「納得できない！ ああ納得できないとも。是非とも否定をしていただきたい。ここは異世界で、召喚とかされちゃった普通の高校生である僕が、これから勇者なり、魔王なりになって、きつといきなり最強の能力とか手にしちゃって、色々な女の子と仲良くなっちゃう。そんな物語が始まるんじゃないの？」

僕が惚れてしまった、目の前に立つ悪魔は、露骨に引いた表情をして、ジト目で見つめてくる。

「はあ……そんな都合の良い話があると本気で御思いなのでしょ。うか。勇者？ 魔王？ 極普通の高校生である貴方が？ 考えても見てくださいよ。例えば敵に攻められて窮地に立たされている異世界の王国で、そんな普通の高校生である貴方を、求める誰かがいると御思いですか？ 逆に悪の頂点に立てると？ 人間を苦しめる、滅ぼせ、魔物に安住の地を？ または最強の力？ 誰が与えるんですか、神様とか？ 有り得ません。そんなことをしている暇があったら、神を信奉している国を救いなさいと私は神に噛み付きたい」

最後が駄洒落であつたのは置いといて、怒られてしまった。

夢に出てきた悪魔に怒られてしまった。

大好きな女性の悪魔に怒られてしまったのだ。自暴自棄になつても、誰も文句は言えまい。いや、僕の夢だし。

そうだそうとも、僕の夢ではないか。それを好き勝手いいやがつて！ こうなつたら、僕だって好き勝手に喋り捲るからな！ 時空とか、設定なんて糞食らえだ。

「プロローグはどうすんだ？ モノローグ調でなんだか達観した主

人公っぽく語ってたじゃないか。前振りだろ伏線だろと思った描写があつたじゃないか。あれで勇者にも魔王にもならなかったら、いきなりこの物語は破綻したことになるぞ！」

言った、言つてやった。決して言つてはいけない台詞を。

僕の敬愛する悪魔は、思わずたじろぐ。ふははざまあみる僕の夢！

「な、何を言っているのでしょうか。プロローグ？ 意味が分かりませんが。きつと夢を見る前、そう、寝る前に何か考え事をしていたのでしょうか。それがプロローグという形となっているのです。きつと夢を小説形式でこっちゃんにしているんですね。大丈夫ですよ。私は分かっていますから」

分析されてしまった。

理解されてしまった。

しかも憂いを帯びた視線を向けられていた。

死にたい。僕を見ないでくれ！　これが禁忌に触れるということなのか！

「そうか、思えば確かに寝る前に、異世界だ勇者だ魔王だと、考えていた気がするよ。いやーよかったよかった。夢ね、うん夢夢」

僕はついさっき言つた台詞を忘れることにした。ていうかなんか言つたっけ。

さて、結論として夢となつたわけだが、事態はちつとも解決して

などいない。今のところ分かっているのは、どうやら夢の中で悪魔に、村人としての役割を与えられそうだという残念な事実だけである。と言うか、こんな夢を見ている僕ってどうなのだろう。

僕は溺愛する悪魔に聞いてみた。

「これが夢って事は、僕の深層心理が関係しているって事なのかなあ。正直へこむんですが」

悪魔は笑顔になる。それも、自愛に満ち溢れた、やさしい笑みであつた。

「ご安心を。貴方の深層心理によって作られた夢ではありませんので。この夢は貴方の現実とあまり関係がないんです。関係があるのは、貴方を村人として選別した際の、分析だけです」

それを聞いて僕は安心した。だってそうだろう。僕好みの悪魔が出てきて、やれ村人だの言い出す夢を、僕の深層心理が作り出していたのであれば、本当に死にたくなる。

いやいや良かった本当。でも言うておかないといけないよな。

「ありがとう。おかげで安心したよ。でもな、断じて僕の性癖は憂愁を感じさせるものではない！ その分析とやらだけは撤回させてもらおうか」

眩い魅力を放つ悪魔は驚きを隠さない表情をした。

「え、撤回するのですか？ 貴方の唯一つの個性を？ 私はかまいませんが、それだと貴方、何の個性も無いキャラクターになっ

まいますよ？ 読者アンケート人気投票で一位にならない主人公ほど悲しいものはありません。それでもかまいませんか？」

「嘘です！ 見栄を張りました。僕は読者アンケートで誰しもが認める、憂愁な性癖を持った男です！」

まあ、不人気は嫌だよね。だよね？

と、まあこの件はさておき、この悪魔、どうも気になる事を言つた。僕の深層心理に関係ない夢だと？ ではこの夢は何だと言つのだろう。

僕は疑問符を一ダースばかり頭の上に浮かべながら、親愛なる悪魔を見つめた。僕と付き合ってください。

悪魔は、一度咳払いをし、僕の求めていた説明を始めた。

「さぞ疑問に御思いでしょうから、説明します。この夢ですが、実のところ正確には夢ではありません。夢とは貴方がここに存在する手段でしかありませんから。もちろん先ほど否定した通り、異世界でも無いですよ？ ここは現実の世界ですから。あと、すみません。まだ出会ったばかりなので、お付き合いするのはちょっと……」

心を読まれている！

まあ、それはいい。良くはないがいい。感触も予想よりいい。お友達から大歓迎である。

それよりもだ、夢が存在する手段？ 現実？ なんだかふざけた物語から、急にシリアスモードに切り替わったようである。

僕は、さらに疑問の外堀を埋めるよう、話を進めた。

「夢が手段ってどういう意味？　ここが現実ってことは、僕は幽体離脱でもしてここに来ているのかなのか。ていうか君は本当に存在するってことなのか？　この胡散臭い場所も？」

「ええ、存在します。ただし、ここは人によって千差万別の方法でたどり着く所なのです。言葉では説明できない場所なんです、言ってしまうえば、皆が共有する物語の中でも思ってください。人によつては妄想。人によつては書籍、人によつては絵、人によつてはゲームなどなど、あらゆる手段で繋がっています。貴方は夢でしたけどね。ゆえに貴方は？　ドリーマー？　です。幽体離脱という手段もあります。貴方は違います。それと、申し遅れましたが、私はデュアルと言いまして？　観測者？　をしています。ですから……ご期待に添えられず申し訳ないですが、悪魔ではありません」

もはや深層心理で構成された恥ずかしい夢のほうのマシだった。それくらい心の中を読まれている。読み込まれている！

まあ、それでもいい。重要なのはデュアルが僕の好みであるということ、もとい、どうやら夢というだけでは片付けられない事態に巻き込まれているということだ。

「率直に言ってくれ。僕はどうなる。ただ夢を見ているだけなのか？　この胡散臭いが、でも現実、みたいな場所にいる夢を見ている目的は何？」

「いいでしょう。率直にいます。ここ、そうですね？　世界の終焉？　？　でも言いましょうか。世界の終焉では、今大きな問題が発生し

ているのです。実は貴方のようにここへ来た人間はいっぱいいます。先ほと言った色々な手段です。ですが、最近一人の人間？ゲームー？のようですが、その人間が不正な力を用いて、この世界の終焉を荒らしているのです。皆が共有する物語のような存在であるがゆえに、あまりひどく荒らされると、物語同様、世界の終焉は破綻します。ですので、貴方にはそのゲームーを止めていただきたいのです」

なんとも信じがたい話である。まあ夢だからね。手段らしいけど。

目的は分かった。でもなぜ僕なのだろう。この、デュアル評するところによる、村人である僕に何が出来る。

「いいよ目的はわかった。ゲームーって要はチートってやつだろう。よくわかんないけどさ。でも、僕である理由はなんなのさ」

僕の質問に、デュアルはきょとん顔をしている。何と可愛らしいのだろう。

「ちーと？ よく分かりませんが。でも貴方である、貴方ではない理由が二つあります。一つ目は、貴方がドリーマーであると言うこと」

「夢でここにいるからと言うこと？」

「そうです。そもそもここ、世界の終焉に来る人達は、皆、ここで存在するそれなりのアドバンテージを、たどり着く方法で持っているのです。例えば？ライター？であれば自身を投影したキャラクターを世界の終焉に送り込むことが出来ますし、正常なゲームーであれば、レベルアップという手段で、世界の終焉をよりスムーズに活

動できるようになります。ですが、ドリーマーはアドバンテージがありません。夢ですから、自身で加工や操作も出来ませんからね。それが理由一です」

何も無いドリーマー。駄目じゃん。

デュアルは続ける。

「つまりですね、今問題である、ゲーマーが何らかの方法で、この世界の終焉を加工しているという事は解りますよね。意図的な能力強化や、強力な武器生成、貨幣の増殖などが主だった行為です。でも言った通り、ドリーマーはここでは何も出来ません。この世界に對して干渉する力がないんです。全くというほどに。でもそれは、観測者としては好都合なんですよ。私が干渉しても影響がありませんから。それであなたに接触しました」

「なるほど、確かに他人の夢には介入できないわな」

デュアルは嬉しそうに頷く。

僕も嬉しそうに頷いた。友達から宜しく。

「理由二です。なぜ貴方なのか。先の分析どおり、貴方は世界の終焉では村人です。普通に普遍的な、物語にあまり関与しない村人。物語に影響を与えないドリーマーで、かつ物語りに無害な村人属性。私の協力者にぴったりなんです。それに、村人ならゲーマーも眼中にさえないでしょうし」

「そうか、言うなれば、僕は毎日食べている食パンの数の一つような存在だと。オラオラですね」

なるほど理解した。心の声に対する回答が無いのは残念だが、まあいい。

でもだ、まだ疑問はある。

「話しはわかった。でもさ、そのゲーマーをやつつけるのに無力なドリーマーの村人である僕にどうしろというのさ」

考えてみると、夢の村人というのも、結構ひどい話である。

「そうですね。確かに普通のドリーマーでは、太刀打ちできないでしょう。そこで、私が貴方の前に現れたのですよ。本来観測者は観る事が仕事なのですが、今回はお手伝いしていただく貴方に、特別な力を与えます。ふふ、まさか無力なドリーマーが観測者から力を与えられているなど、考えもしないはずですよ」

目の前の存在が放ついたずらっ子独特の愛らしさに、僕の心は真夏の棒アイスになっちまいそうだ。いやそんなことより今の話だよ重要なの。

「来たなあいつ！　なんだか今風な物語の展開だ！」

あれ、でもさっき最強の力とか否定されたな。神に噛み付けられないな。

「ただし、タダで与えるわけではありません」

やはりか。試練ってやつだな。まあ在りがちな展開だよな。突然最強の力を与える。に、すこし捻りを加えた程度の構成力だ。



「世界に散らばった龍の玉を七つ揃えれば」

「ちょっと待ったーっ！ 駄目だ、駄目だ！ それ以上言うところの物語は危機的な状況に陥る。盗作はいかん、大人の事情を考慮すべきだ！」

「そ、そうですね」

ふう、危ない危ない。何が危ないかは知らないし、僕も彼女も何も言っていない。いいね？

「で、では、世界を探して回るのは都合上、あるいは文字数、時間、コスト的に大変なので、ここにすべて揃っています！」

変な方向に解釈されている！

デュアルは意気揚々として、言葉を発する。辺りは神秘的な雰囲気（ライトのような光）と荘厳な霧（人工的に見えるスモーク）で支配される。

「さあ、願いを言え。どんな願いも話しただけなら聞いてやろう！」

ここまでいわれたら仕方が無い、展開は危険だし、理由も意味わからないけどな。このフリーズを言われたら言うしかないだろう。願いを。最強の力、最強の武器、違う。

「よ、ようしつ、言うぞ！ ギャルのパンティーおーく……って、話を聞いただけなのかよ！ 叶わないのかよ！ 思わず古典的なギャグに乗ってしまったじゃないか。それより、この展開、ちゃんと伝

わるのか？ 今時はこのネタ古くないか？ 大海賊時代の幕開け的に、この世界の全てをそこに置いてきた。くらいが妥当なのでわ？」

「大丈夫かと、名作は永遠です！」

デュアルは豪語した。ならばよしとするか。

いや、よくない。返してくれよ。僕の願い、返してくれよ。

その時、事態が急変した。

僕が悶々と、精神と時の部屋を行ったり来たりしている最中、突然、事は起こったのだ。

凄まじい轟音であった。ドーム状の岩部屋が大きく振動したのだ。まるで、近くで巨大な何かが倒れたかのような感じであった。

慌てた僕は、すぐにデュアルへ視線を向けた。彼女は苦虫を噛んだかのような顔で、轟音の響いた方角を睨みつけていた。

「もうここまで来たの？」

「な、何が来たのさ」

僕と彼女の間に沈黙が流れる。

「勇者です」

「……は？」

「ゲーマーですよ。さっきの音は、ここを守る門番、まあ中ボスみたいなものですが、彼がやられた音です」

いや、中ボスで。

世界の終焉、軽い物語のようだった。

さて、それより疑問がある。

「一つ聞くが、なぜその、中ボスとやらがここを守っている？」

「ここが、ゲーマー、今は勇者ですが、ゲーマーにとって、最後に訪れる場所だからですよ」

ゲーマー、君は勇者だったのか。なるほど、つまり勇者が最後に訪れる場所ということは、ここは

「もしかして、ここは魔王の間的な？」

「先ほどから察しが良くて助かります」

ゲーマーにとって最低のゲームだーっ！

最後のラスボスの所に、普通の村人がいちゃったよ。

「なぜここに僕がいる？」

「まあ話すのに、ここが一番静かでしたし、先ほど言った通り、ゲーマーにとっては一応一番到達が困難な場所ですから」

そいつはごもつともだ。だが、もう勇者が通り過ぎた村とかでも、よかったのではないのだろうか。僕、村人だし。

「あ、ちなみにここにいた魔王は、貴方が行く予定の村へ、一時的に行ってもらっています」

「ぼ、僕の村がつ！ 性癖の憂愁な人が集う僕の村が魔王に滅ぼされてしまう！ 勇者様！ お助けをおお！」

もう、むちゃくちゃだった。

言うては何だが、すでに世界の終焉、破綻している。

動かない、ただの屍のようだ。

凄まじい音がまた響く。

分厚い扉が、破壊されたかのような音が。

分厚い何重もの列を成した扉が、破壊されたかのような音が。

デュアルはここに来て慌てふためいてた。正直かわいい。キスがしたい。

「ど、どうしますか？ あ、ああ貴方には選択肢が、あああります。一つは、所定の村へ瞬間移動をするか、です。もう一つは」

凄まじい音がまた響く。

分厚い扉が、破壊されたかのような音が。

最後の部屋を守る為にある扉が、破壊されたかのような音が。

「ここが魔王の間か！ さあ出て来い！ 私が決着をつけてやる」

「ゆ、勇者様は私が守りますう」

「へっ、あたしだって負けないからね」

「なによ、まったく。せつかく付いてきてあげたのに……ぶつぶつ」

勇者様ご一行が到着なされた。

どこからどう見ても、ハーレムだった。

完全無欠の、ハーレムだった。

僕は、心の中でモノローグを語る。

自分という存在を、分かりやすく説明する時、僕は決まってこ  
う答えてきた。

深夜の交差点、人通りもなく、車も通らない中、歩行者用の赤信  
号が青信号に変わるまで、ただひたすら待ち続ける人間。それが僕  
だ、と。

詰まる所、僕は白か黒で言えば白なのだ。

正義か悪かで分けるのであれば正義側。

以下、略。

それら、達観を帯びた僕の信条とも取れるモノログが、音を立てて崩れていくのを、僕は見た気がした。

ああ、僕の中に眠っていた魔王が目覚ましそうだ。

ふはははは、よくぞここまで来た。だが、そんな貧弱な女どもを連れていては、話にならんぞ！　どれ、貴様を倒した後に、じっくり楽しんでやろうではないか

「さんっ！　ヒヨリさんっ！　帰ってきてください！」

「はっ！　今のは一体？」

僕はゲーマーが飛び込んできた瞬間、どうやら気を失っていたらしい。

しかし、恐ろしい光景だ。反吐がでる。自分の欲求を物語に投影しているのだろうか、馬鹿みたいだ。データ改ざんまでして。ああなつては御終いだと、まるで、他人の振り見て我が振り直せ、ということわざの語源を見ているようだ。

「ど、どうしますか？　選択肢は先ほど言った二つですよ！　決めてください！」

はて、二つ？　どうやら、僕が遠い異世界へ旅立って、魔王を演じている間に、選択肢の二つ目が説明されていたようである。

「二つ目、もう一度説明してほしいんだけど」

「え？ 聞いてなかったんですか？ 二つ目は」

デュアルが口を開いた瞬間、勇者様ご一行からの攻撃が僕たちに炸裂した。

僕は勢いよく吹き飛ばされ、壁に頭を強打し、思わず頭を擦る。

デュアルも同じ目に合っていたようで、涙目で頭を押さえ、勇者様ご一行もといゲーマーを睨みつけ、

「こ、このチート野郎！ ゲームでさえ努力も出来ない出来損ない人間のくせにっ！」

大分イメージ通りの暴言を吐いていた。

で、言うか普通にチートって言葉を使っただけ。

どうやら彼女、二重人格らしい。正直、好みだ。

「あの、すみませんが二つ目を……」

「ああすいません。二つ目は、このまま目を覚ますか、です」

随分と、迷いようも無い二択であった。

「目を覚ましていいの？ ここまで展開させといて？ プロローグの後にエピソードみたいなの？」

デュアルは、目に入れても視力が上がる効果がありそうなの、きょ

とん顔をする。食べちゃいたいなどと下賤な言葉は要らない。いただきます。

「当然じゃないですか。何度も言う通り、貴方はドリーマーですよ。ここにいる手段は夢なんです。目を覚ます選択肢を選べば、普通に朝がやってきます。あ、ちなみに今は朝の八時半です」

「遅刻だーっ！ あの目覚まし野郎起こせよ！」

まったく、災難しか生まない夢である。選択肢も糞も無いではないか。十人十色という四字熟語があるが、こんな選択肢、誰に聞いても答えは一つだ。

だから僕は言った。言ってやったとも。

常識的に考えて選ばれる方を。

「僕は  
」

またしても勇者様ご一行もといゲーマーの攻撃が、僕達に向けられた。しかし今回は外れたようで、すぐ近くの岩を発泡スチロール製みたいになんかしている。

悠長にしている場合ではなさそうだ。

デュアルの顔を見る。どうやら僕の選んだ選択肢は、彼女の耳にしっかり届いていたらしい。

彼女は僕の目の前に手を伸ばし、



「さあ、私にっかまってください。どんな願いも一つだけ叶えてやるう！」

最後に魅力的な笑みと、言葉をくれた。

「よ、ようし、俺を不老不死にし」

僕はそのボケにすっかり答えつつ。彼女の手を握る。

まったく、災難な夢だ。

## エピローグ（後書き）

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございます。これから  
もこの作品は 続きません！ ええご期待通り続きません。日和  
がどういった選択したかは、ご想像にお任せします。

そういう作品でしたっ！

嘘ですっ！

別の鳴かず飛ばず底辺作品を書いていて、最近人気の異世界ファンタジーに嫉妬しましたっ！ その嫉妬を全力でぶつけた醜作です。続きは頭の中にだけありますが、現在の作品を書き上げるのに忙しくて、アイデアを頭の中から吐き出したかった、と言うのも書いた一つの理由です。そんな作品に付き合わせてしまい、まことに申し訳ありませんでした。

何、異世界？ ボッコボコにしてやんよ！

……みなさん、ジョークって知ってますか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9222j/>

---

観測者と世界の終焉

2011年3月4日13時50分発行